

## 3.11 燃料をつないだ無形の力

渡部 和彦（仙台市水道局 給水部 参事兼計画課長）（当時所属：施設課）

東日本大震災当時は 24 時間備蓄だった仙台市の浄水施設が、どのように最大 98 時間の停電を乗り切ったのか、特命を受け燃料手配に従事した私が、その顛末を書き留めておきたいと思います。

3 月 11 日夜。市内は全域的に停電。浄水場の自家発燃料は、設計上は 24 時間分しか無いが、地震や津波の状況から停電は相当長期化する予感。しかし津波に加えコンビナートで火災が発生するなど、県内の油槽所は出荷不能だろう。当座の分は各浄水場で、取引のある GS などからそれぞれが確保するよう指示し、私は翌日以降の燃料手配に動く。通信状況が悪い中、仙台から燃料入手先を開拓するのは困難なため、日水協に燃料入手ルートの開拓を打診。数時間後、石油連盟が統制しているとの情報を得る。そこで石連との交渉。複数の浄水場の燃料タンクに数klずつ荷下ろし手配をかけるも、先方は大型ローリー1 台分単位での一括荷受を求めてくる。100 万市民の断水危機という非常事態を背景に、かなり強気の交渉となる。水道局⇄石連⇄仙台水道担当となった JX 本社⇄JX 配車センター⇄出荷する油槽所の伝言ゲームとなっているようで、出荷予定や到着予定時刻についてはなかなか見通しが立たない中、時間ばかりが経過していく。後から読んだ話だが、運ぼうにも規制がかかった高速道路の通行許可を得るのに相当苦労されていたとの由。

3 月 12 日。各浄水場の燃料残量は数時間という綱渡りの状況。昨日は使っていた災害時優先電話も途切れがちとなり、1 本の衛星回線が頼みの綱。各浄水場や外部との連絡は困難を極める。

その頃浄水場や、配水所・ポンプ場を所管する課の機転で、普段より取引のある GS からミニローリー2 台を相次いで借用。売るのが底をついたので、快く貸してくれたとのこと。これを用いて停電で開店できない他の GS 等より、数百リットル程度の燃料を奪い合うように確保。これを私の判断で、より残量の少ない浄水場に補給させ、運転をつなぐ。燃料確保に動いている浄水場職員からは、自分の浄水場に運べないことで相当な非難を受ける。中にはポリタンクで GS を往復して燃料補給をつないだ浄水場もあったとのこと。

石連の大ルートが見通せず、残量はじり貧状態で気ばかり焦る窮状を見かねて声をかけてくれたのは、夜を徹して駆けつけてくれた新潟市先遣隊の川瀬悦郎氏。私とは同窓で旧知の間柄。燃料が石油連盟の統制下となっていることを知りつつ

も、新潟市内の業者に燃料輸送の打診を提案いただく。この好意にすぎると他に打つ手はない。夕刻、4 klローリーが出発との朗報が届く。

この頃市の災害対策本部も燃料を石油連盟に要請。石連からは先行していた水道局分も一本化してほしいとの打診があったが、これまで進んでいた話が振出しに戻る可能性があるためこれを拒絶。結果的に水道局は灯油を主体とした発注、災对本部はA重油ということだったので、結果オーライ。

3 月 13 日。未明に新潟からの燃料が到着との報。順次荷下ろし。夜通し悪路を運んでくれたドライバーにさらに無理を言い、市内小口の配送の協力を得る。また、中原浄水場の機転により、さらに 10 klの追加を同業者に依頼。

時を前後して、ようやく石油連盟ルートの輸送が始まる。国見浄水場だけ油種が違い（軽油）、地下タンク容量も小さいため全量荷受けできないとの問題は、現場機転により近隣スタンドで一旦荷受けしてもらうことで解決。この日の夜から翌朝 14 日午前にかけて、石連手配の 2 台と新潟からの 1 台が相次いで到着。携帯は依然不通で、ドライバーとの通信手段がないため、受け入れ先の順番や荷卸し量の変更の伝達は困難を極める。今度は給油が集中しすぎて、各浄水場の地下タンクに空きがなくなり、余剰分は無人の送水ポンプ場に受け入れることとする。夜遅くに復旧作業を終えて戻ってきた職員に、さらに深夜に受け入れ作業のため再出動を指示するのは本当に忍びない。

13 日夜間～15 日にかけて、順次復電。市内 GS から借り受けているミニローリーは、17 日まで配水所・ポンプ場の小口輸送に活躍。

仙台市水道局はこの教訓から、主要施設における燃料備蓄を 72 時間分と改めました。燃料入手の不確実性のほか、まとまった空き容量がないと受け入れ自体ができない点も考慮してのことです。

一方、幸運にもこの難局を乗り切ることができたのは現場職員の熱意や機転、市内外の事業者の協力、日水協や新潟市さんの親身の支援等々、つまりは人の力によるものでした。来たる大規模災害には、ハードはもちろんこの無形の力を総動員して難局を乗り越える必要があります。本市でも当時を知る職員が年々減少する中、市民生活と命を支えている仕事に従事できる有難さと、その使命感を次世代に伝えていきたいと思います。